
『死地福神』

八方美人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『死地福神』

【Nコード】

N4700D

【作者名】

八方美人

【あらすじ】

ラブコメ？バトル？そんなの知らねえ！神への冒涇の始まりだ！

零福神：プロローグ

梅雨の時期になり、初夏の蒸し暑さが始まる頃……さして大きくもないこの町、『仰天』の町長は何を考えたのか、急遽『町おこし』をやるとか言い出しやがった。

初めは

「何してんだか……」とか他人事みたいに思ってたんだケド、このことがきっかけで日常からよく分からない、非日常な生活が始まるなんて思ってもみなかった……。

あーあーあああーあーあーあーあー……

朝。

一昔一世を風靡した……と思う着うたで目を醒ますと、目の前には最近育て始めたアロエで臭くなつた俺の部屋。一つ、背伸びをしてジェルベツトから身を起こすと、俺は窓を開ける。すると、窓から入り込む初夏の心地いい暖かい風。そして――

ガガッ、ガガアアア……

「……うつせえっ!!」

俺の大声も掻き消される程の騒音。最近業者が来て行った外から

の防音をすっかりしないと、ゆっくり過ぎせやしない。

（つたく、早く終わんねえーかな…この工事）

朝食をすませ、外に出るといっそう耳をつんざく工事の騒音。

こうなったのは一ヶ月前だろうか……。いきなりうちの町長が『町おこし』をやるとかい出し、都心へと続く大規模な道路なんかを作り始めた。そのせいで道路周辺に住む俺はモロ被害を被っている。

「よっ、ユーキ。相変わらず騒音がうるさいな」

ふと、自分の名前を呼ばれて振り返ると、そこには金髪のツンツン頭、同じクラスの『はたの篠野 ひろふみ 拡史』が苦笑いをしながら立っている。
「……おお、ヒロフミ。…まだまだ終わりそうにないな、この工事は」

俺も苦笑いをヒロフミに返すと、学校へと続く道を歩く。

少しすると、学校が見えてきて、俺とヒロフミは正門に足を踏み入れる。

……と、その時ヒロフミが急にそわそわし始め、俺に顔を近づけてくる。

「……！ おっ！？ ユーキっ！！ あそこに芹沢さんがいるぞ！！」

「何っ！？ 芹沢さんがっ！？」

多くの生徒が登校中で賑わう、校舎へと続く道。そんな生徒達の視線を浴びている女の子は――

『せりざわ 芹沢 みゆき 深雪』

我が学びの庭、『仰天高校』に首席で入学し、女子の中では身長も高い方で、その抜群のスタイルや、艶やかで腰まである長い髪、

夏用の制服から覗く白い華奢な腕について性格までいいときたら非のつけようがない。二年生になった今でもその人気は衰えることを知らず、逆に上昇し続けている。……ちなみに男の影は全くなし、告白者撃退率は男女含め百パーセント……。

「マジで可愛い！！ あれなら男子と言わず女子からコクられても不思議じゃねえなっ」

ヒロフミが腕を組みながら何か満足そうに頷いている。

「……確かに……。あれだけの容姿を持っていればな」

「あーあ、何？ この貧困感！！」

「おいおい、妬むなよヒロフミ。お前だって黙ってりゃイケメンだぜ？」

「……その言葉そっくりそのままお前に返す」

「……ほっとけ」

キーン、コーン、カーン、コーン……

朝のホームルームも終わり、一限目の国語の授業が始まる。

視線を斜め右横に向けると、そこには凜と立ちながら教科書を音読する芹沢さん。俺はそんな凜とした彼女を見ながら、今日もまた同じクラスになれたことに感動する。

「そーいや、ユーキ」

つと、斜め前に座るヒロフミが控えめに振り向くと、俺に声をかける。

「ああ？ なんだ？？」

音読する芹沢さんに夢中な俺は、半ば右から左に受け流す感じに耳向け、そんな俺にヒロフミが言葉を続けた。

「ユーキは知ってるか？ 最近起きてる仰天町の怪奇現象について」

「……怪奇……現象？？」

「そつ、怪奇な現象！」

小声だが好奇心に満ちたヒロフミの声。

それがこれから始まる非日常の日々に繋がるなんて思っても見なかった。

零福神：プロローグ（後書き）

「だまってればカッコイイ」……言われてみたいね。

吉福神：夜のグラウンドは始まりの場所（前書き）

短いですけど、とりあえず。

壱福神：夜のグランドは始まりの場所

夜、俺は一人家の道場で座禅を組みながら今日、ヒロフミが言っていた事を考えていた。

「俺は見てねえーケド、最近増えてんだよ……化け物を見たって奴がさ」

「……化け物ねえ……おお、コワ」

「……信じてねえな、ユーキ？」

「信じられるわけ……ねえだろ!!」

足の指で床を弾き、一気に正座から中腰姿勢になると、そのまま目の前にある木製の板に向かって一気に加速する。

「ふんっ!!」

右足を深く踏み込み、腰から出した右拳が板に触れる。

その瞬間、板の中心が炸裂音とともに破裂し、床に散らばった。

「……はぁ」

ゆっくりと出した右拳を戻すと姿勢を直し、深呼吸をする。

「化け物……いたら手合わせ願いたいね」

闘いが三度の飯より大好きな爺さんに鍛えられて早十年。爺さんは色んな格闘技、戦闘術、我流の技を見て……その中で特に気に入ったものを自己流にアレンジして、俺を実験台にした。

怪我、死にかけること多多。けど、確かに俺は爺さんの技をものにしてきた。

「……そのおかげで最近じゃこんな事まで出来るようになったし」
俺はさっきぶっ壊した厚さ一メートルの板の破片を見ながらため息をついた。

「今日は満月か……しかも紅い……。」

胴着から家着に着替えた俺は、不吉な月を見ながら外を散歩する。蒸し暑さが続く夜も今日はいくらかマシに思える。

「こんな夜には俺も化け物に会えるかもねえー」

一つ背伸びをしつつ、家に帰る前に学校に寄ることにした。

「んっこらしよ」

学校の正門を丁寧に飛び越えるとグラウンドに足を進める。さして広くはないグラウンドの真ん中には、先生が朝礼などで立つような台があり、そこに寝そべると紅い月に視線を向ける。

「明日もいいことありますよう……！？」

願事のさなかいきなり感じた不穏な気配に俺は跳び起き、中腰のまま辺りを見据える。

（……なんだ……この気配……。爺さんのものとは違う……。ってか爺さん確か中国にいる人喰いパンダと闘いに行ってるはずだっけ……）

辺りにはグラウンドを照らす心細いライトが一つ。

段々増してくる不穏な気配に俺は静かに四つん這いになるとなめまわすように瞳を細めた。

（なんだ……何が起こってる？）

辺りに充満する殺気にも似た気配……。動くに動けない。

どれくらい経っただろうか、額から流れた汗が頬を伝わる。

「！？」

と、いきなり背後に強い視線を受け、咄嗟に後ろを振り返る。

「！？……んだよ……コレ……」

視線を向けた先に見えたのは学校程に膨れ上がった山……。そし

て――

—— 紅く、無数に光る小さな輝きだった。

壱福神：夜のグラウンドは始まりの場所（後書き）

「デーダラボッチがでえたあぞお」

貳福神：今年は子年だよ！（前書き）

……も、申し訳ありません（一言……）小説に重複が見られました
ので修復致しましたm（——）m

貳福神：今年は子年だよ！

人間、生きてれば何らかの危機に直面することもある。それは心、または身体に残る小さな事だったり、または生命、己の存在に関わることだったり……。

そして今、俺にふりかかろうとしているのは、紛れも無く後者の方だ。

「……んだよ、コレ……」

目の前に広がる異様な光景。紅い月に照らされた学校。それより高く、山のように盛り上がる紅い光の集合体。その光りに照らされるモノは、うごめきながらこちらの様子を伺っているように思えた。

（これがヒロフミが言ってた化け物……なのか？）

光りの逆行で影に包まれながらも、威圧感を放つモノ……そして、次の瞬間それは動いた。

「！？」

咄嗟に四肢を弾いて後ろに跳び、崩れるように倒れ込んだきたモノを回避する。

「！？……単体じゃないのか！？」

少々距離をとり着地すると、さっきまで俺が居た場所は、黒い何かの塊によって埋めつくされている。

「……んだよ、こいつは」 さっきまでは紅月の逆光でよく見えなかったが、倒れ込んだきた今なら分かる……。

「こ、こいつは——」

「——ネズミ!？」

夜の散歩は俺の日課だ。程よい暗さは心を落ち着かせてくれるし、何よりも静かなのがいい。

ケド……今度からはやめようと思う……。

「おいおい……冗談やめてくれよ」

片膝をつきながら周りの状況を確認する。紅く光るはネズミの瞳。大量に光る紅い瞳は今や俺をすっかり取り囲んでいる。

「……俺がネズミに何かしたかよ……!? ちっ!」 不協和音な鳴き声と共に、ネズミの塊が俺めがけて波を打つ。

「このっ……天!」 被さるように突っ込んできたネズミが俺の身体に触れた瞬間、右足で思いきり地面を蹴り、左足を軸にコマの要領で高回転する。

そんな俺に触れたネズミの波は勢いよく肉片に成り果て飛び散るが、その中でミキシングを避け、生き残ったネズミが今度は単体で飛び掛ってくる。

「くっ、化け物の被害者第一号になってたまるか!」 少し腰を落とした俺は、背筋を少し曲げ、両拳を腰の位置に構える。

れんげきしよつか
「連撃昇華!」

手足、四肢の連携コンボを駆使し、飛び掛ってくるネズミを吹っ飛ばしていく。

(……ちい、強くないケド……数が多すぎる!)

もう何匹肉片に変えただろうか、ネズミの勢いはやむ事なく、地から湧いて出て来るように突っ込んでくる。

(……このままじゃ守りのスタミナ勝負か……なら——)

イメージするのは鋭利な刃物。それを身体の表面に貼付ける。
そして攻撃は舞うが如く……。

「——時雨^{しぐれ}……」

攻守逆転。ネズミに向かい、俺は突っ込む。

殴らず、蹴らず、ただ触れるだけ。身体に纏った鋭利な気の衣は
ネズミの存在を消失させる。

「……ふう……」

一息ついてから辺りを見回すと、もう俺に向かってくるネズミの
姿もなく、どういう訳か、肉片に変えたネズミすら消えていた。

「……本当だったんだ……アレ」

さっきの非現実的な出来事に俺は困惑する。あれが本当に化け物
の正体なのか？ でも、普通じゃあんなこと起こらないし、ありえ
ないことだ。

が、その考えは次の瞬間、感じ取った悪寒に掻き消された。

「！？」

背筋を氷が滑り落ちるような悪寒。さっきのネズミとは格が違う。

「今度はなんだ！？」

悪寒がはしった方とは逆方向に跳び、姿勢を低く、奇襲に備える。

「……な……」

それはいつからそこに現れたのか。啞然とする俺が目にしたのは
宙に浮かぶ何か。視認出来ないのは暗いこと、その何かに纏わり付
く大量のネズミと、地面からあふれたネズミが俺に向かって飛んで
来たからだ。

「……くそっ！ 上等だっ！！ ただじゃやらねえ！！」

恐怖感はない。ただ、逃げるのは嫌なだけ。

第二波、ネズミの大津波。俺はそれに向かって大地を蹴って突き進む。

「あああつ！！」

踏み込んで放った俺の拳とネズミがぶつかり会うその瞬間。いきなり俺の周りの地面が輝きだし、夜空に向かってのびる。

「なっ！？」

パァーンという甲高い音と共に、光りの中にいたネズミが粉々に弾けとび、散る。

「……何が起きた……」

一瞬、光りに目が眩んだが、すぐに慣れた俺の瞳が見た光景は異様なものだった。

……目の前、光の円柱の外ではまるで時間が止まったかのように固まるネズミ。そこに確かな存在を確認できるが、まるで気配を感じさせない。

「……頭がおかしくなったか……俺は？」

今すぐにも光の円柱から離れたいと思ったが、裏腹に身体がそれを拒絶する。仕方がなく頭を回し、辺りに目を向けると宙に留まる葉、微動だにしない木。

「本当に時間が止まっているのか……」

生気を感じない辺りの雰囲気は俺の思考は困惑する。

「あのか？」

「！？」

いきなり聞こえた声に鳥肌が立つ。

「もし？ 聞こえますか？」

「なんだ！？ 誰だ！」

姿の見えない声に俺は声をあげる。

「あゝ、よかった聞こえてましたか」

暢気な声に逆に警戒心が高まる。

「なんなんだ、お前は！ 姿を見せる！」

「あ、失礼しました」

急に目の前に白い球体が現れ俺の周りをグルグルと飛行する。

「すみません、人間の前に出て来るのは久しぶりなもので……」

「人間の前って……お前は何者なんだ！？ 一体何が起こってるんだよ！？」

俺の問い掛けに白い球体は上下に揺れる。

「んゝ、今説明するのはちよつと無理ですね……時間を止めてくれるのも後少しですし……。所で、貴方に聞きたいことがあるんですが？」

「……なんだよ？」

「……貴方、まだ闘えますか？」

「……はあ！？」

……そして何かが始まった。

貳福神：今年は子年だよ！（後書き）

『一家に一匹、人喰パンダ』

参福神：今年は丑年ですね。（前書き）

気づけば丑年（〃―〃；）そしてやっと投稿・・・・・・・・あの続編も書きだめたので近々投稿します。

参福神：今年は丑年ですね。

「闘えますかって……あいつとかつ!？」

指を指した方向にある、今は動きを止めるネズミと黒い何か。

「はい。まあ、とりあえず闘うというか……ここから離れましょうか？」

「……おいおい、無茶言つなよ!？ さすがにキツイぜ……」

気の抜けた声に肩を落としつつ、今にも噛み付こうとするネズミに溜め息をひとつ。

「いえ、ご心配なく。私が力をお貸ししましょう」

「力って……お前がか？」 白い球体が俺の周りを回りだし、光がいつそう濃くなる。

「はい、後はあなた次第です……出来れば早めにお答えを。時間を止めていられるのも後数分ですから」

気付けば光の柱が段々小さくなっているような気がする。

「……なんだよ……選択肢なんてねえじゃねえか」

「時は金なり。さあ、ご決断を」

顔の真ん前で制止した球体に俺は睨みながら言った。

「わあつた、力を貸してくれ」

「……かしこまりました」 答えると同時に球体が輝きだし、一瞬で俺の胸に吸い込まれるように消えた。

「ぐっ!？ ……い、いきなりかよっ!？」

俺は胸を押さえると同時に、膝をつく。

(…熱い……胸がクソ熱い) 胸から帯びる熱は身体に広がり目眩を起こし、心音が急速に加速していくのを感じる。

(くっ、なんだ……この沸き上がってくる感情は……)

——いけるっ！

光の柱が消失した刹那、目の前のネズミ達が一気に襲い掛かってくる。

が、今の俺には一匹一匹のネズミの動きが手にとるように分かる。

「……らあっ！」

右足を踏み出し、地面に着く瞬間に掌ていを放つ。

それは先頭のネズミに触れると同時に、後ろに集まるネズミさえも粉々に粉碎する。

その中でかろうじて粉碎を免れたネズミは、一旦俺から離れ、飛散すると小さくうなる。

(！? ……なにっ!?)

一番驚いたのは俺の方だ。

「今の……お……俺がやったのか？」

自分の右手を見ると確かな感触。力強く、なにか核心をついたような感じが沸いてくる。

『何をしているんですか？ 次が来ますよ?』

「? はあっ!？」

頭に直接響いてくる声。が、それに答える前にネズミが今度は扇状に広がり、襲い掛かってくる。

(くっ!)

膝を折り一気に伸ばす。ただそれだけの回避。だが、次の瞬間俺

の身体は四階建ての校舎の屋上が見える高さまで飛翔していた。

『ふむふむ。初めてにしては中々ですね。……さあ、とりあえずあのネズミを蹴散らしたらここから離れましょう』

「な、何が起こってんだよ！ クソッ！！」

半ばやけくそ気味に身体をネズミの集団のど真ん中に落下させる。
「波掌！！（はしろう）」

着地と同時に拳を地面に突き立てる。砂埃は一気に天に昇る盾となり、また銃弾さながらのスピードで飛散し、周りにいたネズミの身体を貫く。

『今です。後方にジャンプ』

気の抜けた声だったが、かまってられない。砂埃がまう校庭から俺はもう一度飛翔し、脱出する。

「……夢じゃ……ねえのかよ」

『はい、違います』

一瞬の希望も、いやにさっぱりとした声に掻き消される。

俺は一つため息をつきながら見慣れた町を空から眺めていた。

参福神：今年は丑年ですね。（後書き）

初めての空中散歩。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4700d/>

『死地福神』

2010年10月22日07時46分発行